

途上国への教育支援のうねり

なぜ、今も世界には学校に行けない子供が7,200万人もいるのか——。途上国にみれば子供たちの教育環境を知り、その支援について考えようと、毎年4月20日世界で一斉に「世界一大きな授業」が開催されている。

これは、世界中の子供が教育を受けられることを目指して、180ヶ国のNGO（民間の国際協力団体）や教職員組合が運営するネットワーク「教育のためのグローバル・キャンペーン」が行っているものだ。日本でも「教育協力NGOネットワーク（JNNE：Japan NGO Network for Education）」が中心となって2002年から開かれており、今年2010年には日本各地の小・中学校や大学など351校で41,940人の学生が参加したという。

そのJNNEの中心的メンバーとして、途上国の教育支援という同じ志のもと、地道にアジアを拠点に活動しているのが、これまでの連載で紹介してきたシャンティ国際ボランティア会（SVA）である。もともと曹洞宗の宗門内で生まれた難民救援活動がSVAの前身であったが、いまは仏教精神に基づく教育支援NGOとして、社会とのさまざまなネットワークを形成し活動の輪を広げているのである。

現代社会における「仏教的市民運動」

活動理念が仏教の精神に基づいているとはいえ、SVAの事務所にはごく一般的なNGOの雰囲気は漂う。スタッフの中で僧籍をもつ人は数名のみで、他宗教の方もいると聞いた。連日、10名前後のボランティアが手伝いに通うが、入会後に仏教系のNGOであることを知ったという女性ボランティアは、「本当にお坊さんが出入りしているのを見てびっくりした」と笑って語ってくれた。

こうした今日のようなSVAの活動のあり方を早くから思い描き、熱く語っていたのが、SVAの設立に大きな役割を果たした故有馬実成師である。山口の一僧侶であった有馬師は、若くして差別や貧困など、社会が抱える苦悩に向き合い、その後、インドシナ難民の救済活動に参画することによって国際ボランティアの道へと分け入っていった。目がくらむような厳しい現実を突きつける途上国と、それとは対照的な日本社会、そして宗門との狭間に立ちながらも、やがて教団や宗派という枠を越え、一般市民にも広く開かれた「仏教的市民運動」とも呼ぶべき道を模索していった。大乘仏教の発生が、在家・出家の枠を越えた大衆部の運動に始まったことに喩えて有馬師は、「大乘とは、大きな乗り物という意味。SVAを宗門関係者だけではなく、ありとあらゆる人が一緒に乗れる大きな乗り物にしたい」「SVAの運動は新しい21世紀の行動する大衆部集団になりうるのではないかと、晩年、語ったというが、これらの言葉にSVAに対する彼の思いが凝縮されているように感じられる。

その有馬師の生き方に共鳴し、NGOの世界に飛び込んだというSVAスタッフの大菅俊幸氏は、次のように思いを語る。「我々のような活動に関わることを通し、僧侶の方々には社会の諸問題にもっと眼を向けていただきたい。一般の方々には、葬式仏教などという固定観念から離れて、仏教を再認識していただきたい。仏教は、慈悲や布施など、ボランティアの根底に

ある考えを的確に表現している宗教だと思う」。さらに、「人々の苦しみや痛みに向き合うとき、教義の違いを超えて連携できるのだということを、これまでの活動を通して実感できた。我々のような人間が触媒となることによって、今後も宗派や宗教を越えたネットワーク作りに取り組んでいきたい」と、将来を展望し、目を輝かせる。

30周年、そしてさらなる歩みへ

来年2011年、SVAは設立30周年を迎える。図書館活動と学校建設事業を大きな柱とする教育文化支援活動は着実に成果を残してきているものの、いまだ活動地域では貧富の格差は著しく、教育支援を必要とする大勢の子供たちがいる。現地のニーズに応えるべく、国の内外で最少人数の志あるスタッフによる息の長い努力が続けられている。

だが、ネットワークが広がったことにより他のNGOや一般企業との連携も深まり、組織としての規模が拡大する一方で、活動を支える支援者・会員の数はここ数年横ばい傾向が続く。国内で数多くのNGOが設立されながらも、それらを支える市民意識が日本ではまだ脆弱であるという背景もあるだろう。SVAとしては今後も、支援者に対する的確な情報提供やきめ細かな対応に努めていく方針だ。

大菅氏は30周年という節目の年を迎えるにあたり、次のように語る。「アジア各地で支援活動に取り組んできたということだけではなく、広く日本人にも図書館活動や絵本を読むことの意義を、改めて伝えていきたい。子どもをめぐる問題が深刻化する昨今、それを必要としているのはむしろ日本の子どもたちの方かもしれない。国境を越えて、この時代の人々に必要なことは何かという視点でこれまでの活動を振り返り、次のステップを踏み出していきたい」。それはまさに、「共に生き、共に学ぶ」ことができる平和（シャンティ）な社会の実現を目指す、SVA設立の原点に立ち返ることに他ならない。

近年、原油高・物価高に加え、ドルの急激な変動がアジアの人々の生活を直撃している。SVAによって2008年度までに184棟（840教室）の小学校が建設されたカンボジアでさえも、いまだ小学校だけで15,000教室（棟数にすると3,000～5,000棟相当）が不足し、国内で6年の初等教育を修めることができるのは約半数の子供だけ、という厳しい現実がある。さらに建設資材の高騰や、日本国内の経済不況により資金をどう確保していくか、といった多くの課題が重くSVAの肩にのしかかる。しかし、そんな逆境のなかも続くSVAの歩みは、どっしりとアジア各地の大地に、そして何よりも人々の心に深く刻み込まれることだろう。

美しき蓮の花よりも、その花を咲かせる泥になりたい——。タイ・バンコクのスラムで教育支援に生涯を捧げた女性活動家が語ったこの言葉に、有馬師は大変な衝撃を受けたという。社会的に弱い立場の人々と共に歩み、いつか子供たちが美しい華を咲かせるように、という熱い思いが今もSVAスタッフには脈々と受け継がれている。

[参考文献]

大菅俊幸『泥の菩薩』大法輪閣、2006年。